

新入園児の愛着と母親行動の予期能力

天野菜穂子*・宮本正一**

Relationships between Attachment and Ability to Anticipate Mothers' behaviors of 3-year-old Kindergartners

Naoko AMANO, Masakazu MIYAMOTO

The purpose of the present study was to examine the relationship between attachment and ability to anticipate mothers' behaviors of 3-year-old kindergartners using the Picture Insight Test. Fifty-two children were asked to respond what kinds of emotion their mothers express in 5 kinds of P-F Study-type card situations that depict general family scenes. The secure attachment children performed better anticipation than the insecure, avoidant group (Table 12). These results were examined and discussed in relation to other factors.

Key words: attachment, cognitive ability, Picture Insight Test

我々は、3歳児がはじめて幼稚園に入園し幼稚園生活を送り始める時の園での彼らの様子や、彼らの養育者との分離場面を観察した。その際、次のようなエピソードがあった。

N児は登園後母親と別れてからしばらく遊ぶのだが、母親を思い出す度に「お母さんはどこ？ちゃんと迎えに来る？」と先生や筆者に泣きながら何度も問い、とても不安そうであった。

M児は入園当初、母親のすぐ近くで遊んでいたが、1週間後に母親が「今日はMちゃん（M児）を幼稚園へ送ったら、お母さんは郵便局へお使いに行っておくるから戻ってくるまで、幼稚園で待っててね」とM児に言い聞かせた。M児は母親の言葉に納得して、母親が迎えに来るまでの間、幼稚園で過ごすことができた。M児はおそらく過去に母親と共に郵便局へお使いに行った経験があり、母親の言う「郵便局へのお使い」の意味がよくわかっていた。また1週間幼稚園で過ごした経験から、幼稚園は安心な場所であり、いろいろな遊び道具もあり、困ったことがあったら先生のところへ行けばいいと判断したのであろう。

しかしながらN児とM児に現れた愛着行動には大きな違いがあった。ボウルビイ（1982）の発達段階説によれば、前者は第3段階にとどまっており、後者は第4段階に達しているといえる。

このような子どもの表す愛着行動の違いについて、ボウルビイ（1982）は次のように述べている。つまりそれは、子どもが母親の行動や母親の行動に影響していることがらを観察することによって、母親の目的や到達しようとしている計画が何であるかを洞察する力を持つようになるためである。その結果、母親の感情や動機を洞察できるようになるので、愛着行動のパターンが大きく変化するであろう、そしてこの洞察力が獲得され、愛着に質的变化が起こるのは3歳前後であろうと。

そこで本研究においては、子ども達の愛着発達の特徴の違いが、母親の動機や感情を洞察する能力の獲得に基づくものであるかどうかを、繁田（1985）が開発した洞察力テストを用いて検討することを目的とする。

まず繁田（1985）が開発した洞察力テストの理

* 岐阜県立岐阜病院小児科（Pediatrics, Gifu-Prefecture Hospital）

** 岐阜大学教育学部学校教育講座（Department of Psychology, Faculty of Education, Gifu University）

論的背景にある愛着の発達理論について述べる。

ボウルビィ (1982) の愛着発達段階説によると、2歳から3歳にかけて愛着の発達段階は第3段階から第4段階に移行することになる。

繁田 (1985, 1987) はStrange Situation法を用いて、1歳から2, 3歳にかけて子どもの母親への愛着行動のパターンがどのように変化していくのかを検討し、母親への愛着行動が1歳から2, 3歳にかけて身体的接近、接触を中心としたproximalなものから、視覚的相互作用や発声活動による相互作用のように、距離をもったdistalな相互交渉へと変化していくこと、それに伴い、母親との分離がスムーズになってくることなどの結果を得た。母親への愛着行動に発達的な差が見られたのである。特にこの差は1歳から2歳までの1年間よりも、2歳から3歳までの1年間により著しく、2歳までは母親との接近、接触が多く分離不安も高いが、3歳児は一般に距離をもった相互交渉が多く、分離もスムーズであった。

この2歳から3歳にかけて愛着の発達上の変化を繁田 (1985) は洞察力の獲得によるものと捉え、3歳児の母親の感情や動機を洞察する能力を測定するための洞察力テストを開発し、洞察力の高い子どもと低い子どもの間に、Strange Situationでの行動にどのような差異が見られるかを検討した。

洞察力テストは、3歳児において日常的と思われる生活場面を10場面 (食事、睡眠、排泄、危険、外出、お話、会話、怪我、いじめ、プレゼント) 設定し、それぞれの場面で子どもが母親の表情や感情や行動をどの程度推察しているかを質問して、その応答の結果を得点化していくものである。

この洞察力テストの結果とStrange Situationでの行動の間にはかなりの関連が見られ、洞察力テストの得点の高い子どもは、活発に探索活動をし、母親とは言葉や微笑によるdistalな相互交渉を多く持ち、母親との分離にも不安を示さない。また分離後の再開時には、歓迎の意を持って接し、すぐに母親を受容できる。さらに母親の不在に関わらず、strangerとの相互作用も積極的に営むことができるなどの行動特徴を示した。

一方、得点の低い子どもは、母親との交渉はproximalであり、母親との分離不安は大きく、分離後の再開時には歓迎行動が見られない。母親に

対して怒りや反抗を示す。またstrangerを無視したり、回避しようとするなどの行動特徴が見られた。

さらに繁田は、母親の感情や動機を洞察できるということは、他児の感情や動機を洞察することにもつながり、友好的な仲間関係を形成する一つの要因になっているのではないかと考え、この研究の対象児が保育園児であることから、保育園での行動観察や保母による評定を通して、洞察力テスト得点と保育園での仲間関係との関連も見た。その結果、他児が困っているとき援助してあげる、他児がほしがっているものを与える、他児の泣きや痛みに対して敏感に反応する、などの項目で洞察力テストの得点と関連が見られた。

このように3歳児で他者の感情や動機をよく洞察できる子どもは、Strange Situationにおいて安定した母子関係を示し、保育園においても友好的な仲間関係を営んでいると一応いうことができた。

しかしながらこの他者の感情や動機を洞察する能力は、どのような能力で、いかに発達するものであろうか。

この洞察力テストの結果は、鈴木ビネー検査と高い相関を示した。そういう意味では、測定した洞察力の中に知的能力が多分に入っていることは否定できない。しかし「知能の高い者は愛着も健全に発達する」というほど単純なものではないだろう。

母親は、子どもの赤ちゃんの頃からいつも「なぜ泣いているのだろう」「どうして機嫌が悪いのだろう」「この子は何をほしがっているのだろう」と子どもの気持ちを推し量ろうとする。つまり我が子の欲求や感情や動機を洞察しようと試みてきている。

このような「他者から洞察される」体験の積み重ねが「他者を洞察する」能力の基礎になっているのではなかろうか。

その意味で、愛着の健全な発達と関わるのは、単純な知的能力ではなく、母親が我が子の感情や動機をどの程度推し量りながら母子相互作用を営んできたか、その相互作用の積み重ねを通して子どもが母親への信頼感をどの程度深めていったか、にかかっている。その信頼感の基礎の上に、認知能力の発達が伴って、子どもが母親の感情や動機を正しく洞察できるようになったとき、子どもはスムーズにボウルビィ (1982) の唱えた発達段階

説の第3段階から第4段階へ移行できると考える
(繁田, 1987)。

方 法

1. 被験者

1997年4月に岐阜県内において新入園した、
A幼稚園101児から118児までの18名、B幼稚園
201児から234児までの34名の計52名。

2. 実験期日および場所

1997年6月。子どもの所属する組の教室。

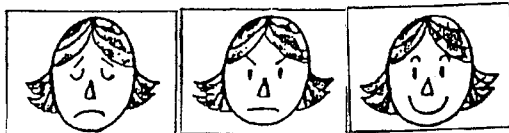
3. 手続き

ここで用いる洞察力テストは、10場面で10枚
の図版であったが、被験児が新入園児でまだ幼
稚園の生活に慣れきっていない時期なので、検

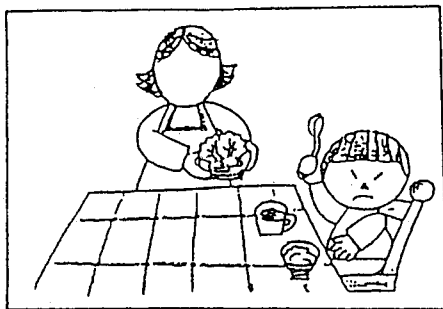
査時間を考慮し、図版を半分の5枚に減らし
た。選択した図版は、食事場面、排泄場面、怪
我場面、いじめる場面、プレゼント場面で、図
1に示すものである。それでは、子供達に対面
したときの実験の手順を述べる。

①はじめに母親の表情(笑い、怒り、悲しみ)
の描いてあるカードを提示し、それぞれの表
情が、どのような表情であるかを尋ね、表情の
確認を行う。

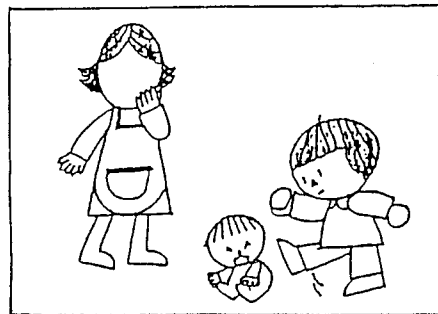
②次に図版を順に提示して状況を説明する。図
版には母親の表情が描かれていないので、説
明した状況に適切と思われる母親の表情を、
母親の表情のカードから選択させる(1段
階)、その後、子どもは母親の態度にどう反



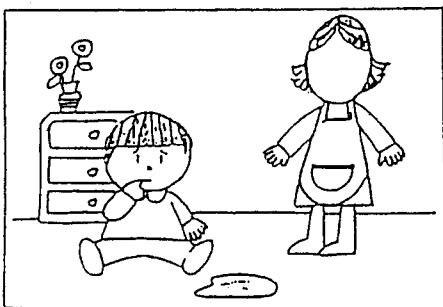
母親カード 哀・怒・笑



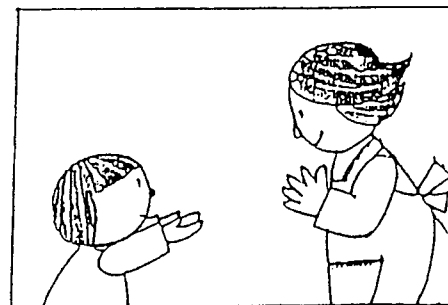
食事場面



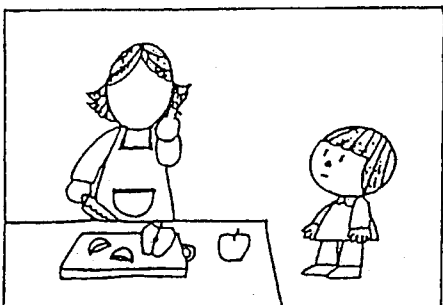
いじめる場面



排泄場面



プレゼント場面



怪我場面

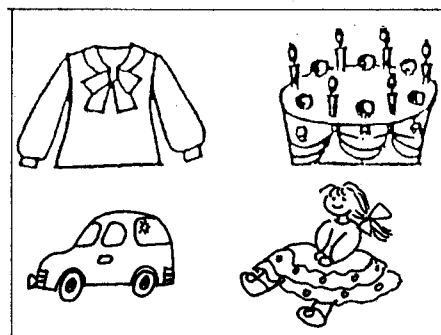


図1 洞察力テスト

応するのか(2段階)、それに対して母親はどう対応するのか(3段階)を順にたずねる。それぞれの図版に対する教示は表1に示す。

表1 教 示

場面	第1段階	第2段階	第3段階
1. 食事場面	お母さんがおいしいものをつくってくれたのに、○ちゃんは嫌いだからいやだっで食べないの。お母さんどんな顔になっちゃうかな。	そしたら○ちゃんは どうするの。	○ちゃんがそうしたら、今度はお母さん どうするの。
2. 排泄場面	○ちゃんがお部屋でおしっこしちゃったよ。お母さんどんな顔になるかな。	そしたら○ちゃんは どうするの。	○ちゃんがそうしたら、今度はお母さん どうするの。
3. 怪我場面	お母さんがね、おりんごを切っていたらね、包丁で指を切ってしまいました。お母さんはどんな顔になるかな。	そしたら○ちゃんは どうするの。	○ちゃんがそうしたら、今度はお母さん どうするの。
4. いじめる場面	○ちゃんが小さい子をキックしていじめているよ。お母さんはどんな顔になるかな。	そしたら○ちゃんは どうするの。	○ちゃんがそうしたら、今度はお母さん どうするの。

③5場面の教示では、子どもにまず「今日はお母さんの誕生日です」と話し、「お母さんにあげるプレゼントは何がいいでしょう」と言ってプレゼントの図版を見せ、ケーキ、洋服、自動車、人形の中から子どもがあげたいと思うプレゼントを選ばせる。最後の課題は、いわば「思いやる」という気持ちを測定しようとする試みで、この「思いやる」という気持ちは洞察力につながっていると考えたからである。母親の気持ちを推し量り洞察していく力のある子どもは、おそらく母親の日常を観察したり共に経験したことをもとにふさわしいプレゼント、ケーキや洋服を選ぶだろうし、洞察する力のまだ弱い子どもは、自己中心的に自動車や人形を選ぶことが予想される。ただ今ここで使った自己中心的という言葉は、子どもの利己主義とは何の関係もないことを述べておく。

④最後にそれぞれの課題を得点化する。

結 果

実験を始めて、子ども達の反応を見ながら気づいたことは、3歳児にとってたとえ絵であっても、現実の世界で今起きていることを仮定していくことは難しいということであった。

食事場面で、「○ちゃんが、お母さんがごちそうを作ってくれたのに『きらいだよ』と言って食べないよ」と教示するや否や「ぼく食べるもん。お母さんの作ってくれたごはんみんな食べるもん」と言い張って課題が進まない。同様なことが排泄場面やいじめる場面でも起きてきて、「わたしはお部屋では絶対おしっこしない」「ぼくは、小さい子を叩いたことないよ」と主張する。どの子どもも真剣に答えてくれた結果なのであるが、筆者は、○ちゃんを本人とはせず、絵の中の子どもを「この子」と呼んで教示を加え、援助した。

また1段階で母親の顔を選ばせた後、「お母さんはこんな顔をするんだね。そうしたらこの子は
どうするの」(2段階)、「この子がそうしたら、
今度はお母さんはどうする?」(3段階)という
具合に教示を与えていくと、子どもの頭の中で仮
定が立て続けに2回も起こることになり、多くの
子どもは混乱した。

そこで教示は2段階までとし、教示と子どもとのやりとりの中で矛盾がなければ、1段階で正当であった場合1点、2段階で正当であった場合で1点とした。したがって満点は8点となる。矛盾がないやりとりとは、一般的な洞察の程度からみて、排泄場面ならば1段階では「お母さん、こらーって言うよ」2段階で、「ぼく、ごめんなさいするよ」となる。ところが同じ場面の1段階で「お母さん、にっこりのお顔」と言う子どもがいる。そこで2段階で「どうしてそういうお顔になるの?」と尋ねると、その子どもは、「あのね、おしっこ出ちゃってもそんなに泣かなくていいんだよ、失敗したって泣かなくていいんだよって言うてくれる」と答えた。前者の怒り顔と後者のにっこり顔は両極端であるが、その子どもの、母親の取りうる態度や行動についての洞察力に関しては、全く矛盾がない。したがってこの場合は得点を与えることとした。上記のような教示と子どものやりとりを吟味した上で採点を行った。

採点の結果、図2に示す得点分布をしたグラフになり、分布曲線から4点以下を低得点群、5点以上を高得点群としてグループ化した。そして低得点群を1、高得点群を0と記号化した。

プレゼントの場面においては、母親に贈るものとして車を選択した場合を1、人形を選択した場合を2、ケーキを選択した場合を3、洋服を選択した場合を4とプレゼントの種類を記号化し、洞

察力を要するプレゼントとして洋服やケーキを選択した場合を1, 自動車や人形を選択した場合を0と記号化した。以上のことをまとめたのが, 表2である。

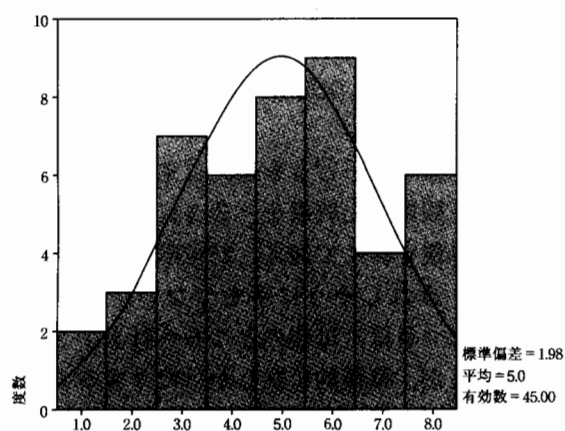


図2 洞察力テストの得点分布

なお言語的な発達の遅れのある者4名, 分離不安が高いため実験が実施できなかった者1名, 実験に協力しなかった子ども2名を, 被験者52名から除き分析は45名に実施した。

ところで我々(天野・宮本, 1998)は, 洞察力テストを実施するのに平行して, 被験者の性別, 誕生月, 兄弟順位を調査した。また毎日の子どもと親との分離不安の状態や, 園での生活の様子を観察した。そして, 幼稚園へ子どもを迎えにきた母親に子どもが再会したときの様子, 子ども達にとっては見知らぬ人である筆者に対する態度, 耳鼻科検診を受けるときの子どもの様子, 子どもが先生と接するときの特徴的な態度を, 項目を設け, 記録した。さらに, PAT (Picture Attachment Test) を実施し, 子ども達の対人関係の取り方を調査した。そしてその結果から子ども達がそれぞれどのような対人関係のネットワークを持っているかについて, おおよそ4つの型に大別し, 愛情のネットワークの4タイプと命名した。

そこで表2をもとにして, 性差, 誕生月区分, きょうだい順位, プレゼントの種類, プレゼント得点, 再会直後の子どもの様子, 見知らぬ人, 耳鼻科検診時の子どもの様子, 先生との密着, 分離不安のタイプ, 愛情のネットワークのタイプと洞察力テストの得点群との関係を, 表3～表13に示した。

表3に示すように, 性差と洞察力テストの得点群の間には関係が認められない。

表2 洞察力テストの結果一覧

No	4場面の得点	得点群	プレゼント得点	プレゼント種類
101	2	1	1	3
102	5	0	1	3
103				
104	5	0	1	4
105	4	1	0	2
106	1	1	1	3
107	6	0	0	1
108	8	0	1	3
109	5	0	1	3
110	6	0	0	1
111	6	0	1	3
112	2	1	1	3
113	8	0	1	3
114	3	1	0	1
115				
116				
117	6	0	1	4
118	3	1	1	4
201	1	1	0	0
202	3	1	1	4
203	5	0	0	1
204	6	0	0	1
205	8	0	0	1
206	8	0	0	2
207	7	0	1	4
208	7	0	1	3
209	3	1	0	1
210	6	0	1	13
211				
212	4	1	1	3
213	4	1	1	4
214				
215				
216	4	1	1	3
217	8	0	0	1
218	5	0	0	1
219	5	0	0	1
220	6	0	1	3
221	4	1	0	1
222				
223	6	0	0	2
224	7	0	0	2
225	3	1	1	3
226	6	0	1	3
227	3	1	0	2
228	2	1	0	1
229	4	1	1	4
230	3	1	1	4
231	5	0	1	3
232	8	0	1	4
233	5	0	1	3
234	7	0	1	4

表3 性差と洞察力得点(人)

	0(高得点群)	1(低得点群)	Total
0(男子)	18	8	26
1(女子)	9	10	19
Total	27	18	45

$$\chi^2 = 2.18, df=1, n.s.$$

表4に示すように, 1年を3つの時期に分け, 4月から7月に生まれた子ども, 8月から11月に生まれた子ども, 12月から翌3月に生まれた子どもに三分し, 洞察力テストの得点群との関係を調べたが, 結果は有意ではなかった。

表4 誕生月区分と洞察力得点 (人)

	0(高得点群)	1(低得点群)	Total
1(4, 5, 6, 7月生)	8	7	15
2(8, 9, 10, 11月生)	12	3	15
3(12, 1, 2, 3月生)	7	8	15
Total	27	18	45

$$\chi^2=3.89, df=2, n. s.$$

次にきょうだい順位を検討する。ここでは男子女子を問わず、年齢の上下関係を表すために、以下では、ひらがなで「きょうだい」と表現する。きょうだい構成において、その子どもが長子、中間子、末子のいずれかを決定し、洞察力テストの得点群との関係を求めた。

表5に示すとおり、両者の関係は有意ではなかった。

表5 きょうだい順位と洞察力得点 (人)

	0(高得点群)	1(低得点群)	Total
1(最長子)	13	6	19
2(中間子)	3	2	5
3(末子)	11	10	21
Total	27	18	45

$$\chi^2=1.09, df=2, n. s.$$

表6に示すとおり、子ども達が母親にどんなプレゼントを選んだか……選択したプレゼントの種類と洞察力テストの得点群との間は、有意な関係ではなかった。

表6 プレゼント種類と洞察力得点 (人)

	0(高得点群)	1(低得点群)	Total
0(選ばない)	0	1	1
1(車)	8	4	12
2(人形)	3	2	5
3(ケーキ)	10	6	16
4(服)	5	5	10
13(車・ケーキ)	1	0	1
Total	27	18	45

$$\chi^2=2.85, df=5, n. s.$$

また母親が誕生日にもらって喜ぶプレゼントを推測することによって、ケーキや洋服を選択したものには1、母親の興味関心を自分と同一の目線で捉えているものには0と得点化し、プレゼント得点と洞察力テストの得点群との関係をみた。結果は、有意ではなかった。

表7 プレゼント得点と洞察力得点 (人)

	0(高得点群)	1(低得点群)	Total
0(車・人形)	11	7	18
1(ケーキ・服)	16	11	27
Total	27	18	45

$$\chi^2=.015, df=1, n. s.$$

母親が幼稚園に子どもを迎えに来たときの子どもの様子を観察した結果を、3つに分類した。一つ目は、母親を喜んで迎え、幼稚園での出来事を話したり、うれしそうに手をつないだりするグループ。二つ目は、母親のところへ行き手をつないだりするが、積極的に話しかけたりすることがないグループ。三つ目は、母親の出迎えに対して表情がなく、母親を避けたりするグループ……である。そしてこれは、入園当初の慣れないことからくるお迎え時の混乱が収まった5月に観察を行った。表8に、洞察力テストの得点群との関連を示したが、有意に関係を認めることができた。

表8 再会直後の子どもの様子と洞察力得点 (人)

	0(高得点群)	1(低得点群)	Total
1(喜ぶ姿)	10	1	11
2(中間)	14	10	24
3(無表情)	3	7	10
Total	27	18	45

$$\chi^2=8.15, df=2, p<.05$$

本研究の場合、観察者自身は子ども達にとって、自分達の世話をしたり遊んだりするが、当初は見知らぬ人であった。したがって、観察者(天野)は、「見知らぬ人が接してきた場合、その人に対する子ども達の不安がどのようなものであるか」という点も観察したことになる。

そこで入園直後の4月の時点において、子ども達が観察者に対して示した態度をまとめて分類した。

積極的に観察者に話しかけてきたり関わってきた子どもを親密群、自分から関わってくることはしないが観察者が働きかけたことについては応じた子どもを中間群、観察者が働きかけようとするのを避けたり観察者と目を合わせないようにした子どもを疎遠群とした。表9に示すように、各群と洞察力テストの得点群との関係は認められなかった。

表9 見知らぬ人と洞察力得点 (人)

	0 (高得点群)	1 (低得点群)	Total
1(親 密)	8	5	13
2(中 間)	11	6	17
3(疎 遠)	8	7	15
Total	27	18	45

$$\chi^2=.45, df=2, n.s.$$

B幼稚園においては、耳鼻科検診が実施された。幼稚園でお医者さんに耳や鼻を診てもらうことに対して、事前に先生から説明があったにもかかわらず、子ども達の中には大きな不安を示した者達がいた。そこで、自分達の教室から保健室まで並んで歩いていく途中で、泣き喚いたり、逃げ出したり、先生にしがみついたりといった情緒的混乱を示した子ども達を混乱有群、混乱を示さず耳鼻科検診を終えた子どもを混乱無群とした。そして洞察力テストの得点群との関係を表10に示したが、両者の間に有意な関係はなかった。

表10 耳鼻科検診時の子どもの様子と洞察力得点 (人)

	0 (高得点群)	1 (低得点群)	Total
0(混乱無)	10	4	14
1(混乱有)	8	8	16
Total	18	12	30

$$\chi^2=1.43, df=1, n.s.$$

幼稚園生活において、多くの子ども達は、時折ふと母親を思い出す。また友達とのトラブルに対処できなかったり、怪我をすると、先生を幼稚園での安全基地であるかのように頼る。子ども達は、先生に、何かを訴えたり、時には、言葉もなく抱きついたりする。

しかしここでは、そういった一時的な先生との触れ合いではなく、継続的に教師に接している子ども達がいる。登園後、母親と別れた後、ずっと先生の後追いをしたり、絶えず先生と手をつないでいないと不安でたまらない子ども達がいる。このような子ども達を教師密着群、そのような状態にはならなかった子ども達を教師密着無群と呼ぶ。表11に示すとおり、先生との密着の有無と洞察力テストの得点群の間には、有意さが認められなかった。

表11 先生との密着と洞察力得点 (人)

	0 (高得点群)	1 (低得点群)	Total
0(密着無)	24	13	37
1(密着有)	3	5	8
Total	27	18	45

$$\chi^2=2.05, df=1, n.s.$$

我々(天野・宮本, 1998)は、毎日の子どもと母親との分離の状態を観察した。そして、4月から7月における母親とのお別れにおいて、分離不安を起こさなかった子ども達、4月においてのみ分離不安を起こした子ども達、7月には分離不安は解消していたが、そこに至るまでかなり強く分離不安を起こした子ども達、7月に至っても分離不安を起こしている子ども達というように不安の強さを段階別に分類した。

そして分離不安を起こさなかった子どものグループを分離不安低群、7月に至っても分離不安を起こしている子どものグループを分離不安高群と呼んだ。表12に示すように、それらと洞察力テストの得点群との間には、関連を見出すことができた。

表12 分離不安のタイプと洞察力得点 (人)

	0(高得点群)	1(低得点群)	Total
1 (分離不安低)	13	6	19
2	11	2	13
3	3	6	9
4 (分離不安高)	0	4	4
Total	27	18	45

$$\chi^2=12.51, df=3, p<.01$$

また我々(天野・宮本, 1999)は、PAT (Picture Attachment Test) を実施することにより、子ども達の認識している対人関係を調査した。

そして次のような知見を得た。子ども達の対人関係は大まかに4タイプに分類することができた。まず「家族母型タイプ」、これはその子どもの対人関係の中心的役割を母親が占めるタイプ。次に「仲間発展型タイプ」、このタイプの子どもは、困ったときや心細い時には母親を頼るのだが、母親以外の家族とも関わりを多く持ち、友達や幼稚園の先生とのつながりも持っているタイプ。3つめは、「家族その他型タイプ」というもので、対

人関係の中に母親が抜け落ち、また家族以外の仲間にもつながりを持たない。もっぱら母親以外の家族に対人関係を求めているタイプ。4つめは「仲間・ドーナツ型タイプ」、このタイプが認識している対人関係の中に、母親は存在しないのだが、その代わりに母親以外の家族や仲間とのつながりを持っているタイプ。

そして以上の4タイプを「愛情のネットワークのタイプ」と命名し、それらと洞察力テストの得点群との関係をみたのだが、表13の示すとおり、結果は有意ではなかった。

表13 愛情のネットワークのタイプと洞察力得点 (人)

	0(高得点群)	1(低得点群)	Total
1 (家族母型)	8	5	13
2 (仲間発展型)	15	7	22
3 (家族その他型)	2	1	3
4 (仲間ドーナツ型)	2	5	7
Total	27	18	45

$$\chi^2=3.56, df=3, n. s.$$

表3、表4、表5より性差、誕生日、きょうだい順位と洞察力テストの得点群の間には有意な関係はなかった。

またプレゼントの種類(表6)、プレゼント得点(表7)と洞察力テストの得点群の間にも有意な関係はなかった。

再会直後の子どもの様子(表8)、見知らぬ人(表9)、耳鼻科検診時の子どもの様子(表10)、先生との密着との関係(表11)と洞察力テストの得点群との関係を見ると、再会直後の子どもの様子(表8)が洞察力テストの得点群との間には有意差が見られた。

また表12より、分離不安のタイプと洞察力テストの得点群の間には、有意差が見られた。愛情のネットワークのタイプ(表13)と洞察力テストの得点群の間には有意差が見られなかった。

考 察

表3より性差と洞察力テストの得点の間には、有意差が見られなかった。繁田(1985)も性差と洞察力テストの得点の関連については、報告して

いないので、性差と洞察力の2つの項目の間には、関連がないと考えられる。

表4より誕生日区分と洞察力テストの得点の間には有意差が見られなかった。値の散らばり方を見ると、早く生まれたからといって洞察力が発達し、遅く生まれたので、洞察力が未発達であるとはいえない。誕生日と洞察力の間に関連がないと考えられる。

表5よりきょうだい順位と洞察力の間にも関連がないと考えてよいと思われる。

表6よりプレゼント種類と洞察力テストの得点、表7よりプレゼント得点と洞察力の間にも有意差が見られなかった。プレゼントの図版で行った実験と同様の実験をFlavellが報告している(ポウルビィ, 1969)。Flavellは3歳から6歳にわたる子どもに、おもちゃのトラックと口紅、人形とエプロンというような対になる絵カードを何枚か用意し、母親の誕生日に贈るにふさわしいものを選ぶという課題を出した。子どもの自己中心性を調べたのであるが、3歳児のうちこの課題に成功したのは4分の1程度だったと報告している。本実験の場合、ケーキ、服を選んだのは、27名で全体の60パーセントにあたるが、絵カードは1枚使用したのみなので、子どもの選択に際しては偶然の要素が大きいといえるかもしれない。しかしながら実験のときの子ども達は、5場面の図版を見たとき、最も喜び、何度もその絵を見たがった。そしてどの品物を母親に贈るべきかずいぶん迷う姿も見られ、この課題が子どもには物珍しい新しい体験であったと思われる。どういう品物を選ぶかは別として、母親のために贈る品物をどの子も積極的に考え、選ぶことができたということは、思いやりの萌芽が3歳児の心に見られるということではなかろうか。

表8より、母親の迎えに際し、高得点の子どもは喜びを表し、低得点の子どもは無表情となっている。繁田(1985)の、母親の感情や動機を洞察できるということは他児の感情や動機を洞察することにもつながり、友好的な仲間関係を形成する一つの要因となっているという考えに沿ってみると、低得点群の子ども達は他者の動機や感情がわからないままに幼稚園という環境にいたのであり、そこではのびのびと楽しい体験をしているという感覚にはほど遠く、ストレスフルな状態にさらされているといえよう。そんな中で母親が迎え

に来てくれても、楽しい思いはしていないので、母親に語ることができず、心身共に疲れており、表情に乏しくなるのではないだろうか。また、母親との再開時に無表情で低得点であった子ども7名のうち3名は、先生の援助がなくては仲間と遊ぶことができなかった子どもであり、2名は仲間と頻繁にトラブルを起こしてたたき合いになることもしばしばあった。また残りの2名は先生や友達には関心が薄く、ごろごろと寝転がっていることが多い子どもであった。したがって、これらは、先の繁田（1987）の、母親の感情や動機を洞察できるということは他児の感情や動機を洞察することにもつながり、友好的な仲間関係を形成する一つの要因となっているという考えを裏付ける事実とみてよいだろう。

表9より見知らぬ人と洞察力テストの得点の間には、有意差が見られなかった。繁田（1985）によれば愛着の対象との間に安定した関係が結ばれていれば、洞察力は形成され、子どもは愛着の対象を基地として、見知らぬ人と交渉ができる。しかし表9では値が散らばっていて、意味のある情報を得ることができなかった。

表10より耳鼻科検診の時の子どもの様子と洞察力テストの得点の間には有意差が見られなかった。しかし低得点群においては、混乱を表したものの比率が高かった。耳鼻科検診というのは、子どもにとって、予想もつかない出来事であったが、事前に担任の先生が、「お医者さんがみんなのお耳やお鼻をのぞくだけで痛いことは何もしないよ」と話している。そして先生は額帯鏡をかぶってお医者さんに扮して、お医者さんのやることを子どもの前で実際にやって見せている。この先生の一連のパフォーマンスから、お医者さんが自分にどう関わってくるかを洞察し得た子どもは、おそらく不安が少なく落ち着くことができたと思われる。したがって、この結果から、洞察力の低い子どもは、予期せぬ出来事に対して、耐性が低い傾向にあると考えられる。

表11より先生との密着と洞察力テストの得点の間には有意差が見られなかった。しかしながら高得点群においては、先生に密着した者の比率が低く、低得点群においては、先生に密着した者の比率が高かった。洞察力の低い子どもは、仲間の気持ちを洞察したり、予期せぬ出来事に安定して対処することができないため、幼稚園の生活は不安

に満ちたものであろう。そんな彼らにとって、先生と密着していなければ、安心して過ごすことができない。したがって、低得点群は先生との密着度が高く、高得点源はそれが低いという傾向を示すのだと考えられる。

表12より分離不安のタイプと洞察力テストの間には有意差が見られ、洞察力テストの得点の低い子どもは分離不安が高いことがわかった。幼稚園での母親との分離を広義の Strange Situation と見るならば繁田（1985）の得た結果と同様なものを得ることができたと考えてよいだろう。また分離不安が低いにも関わらず、洞察力テストの結果も低い子ども達が6人いた。この場合には繁田が指摘するように知能の要素も含まれるのではないかと考える必要はないだろう。

表13より愛情のネットワークのタイプと洞察力の得点の間にも有意差は見られなかった。しかし、タイプ4の仲間ドーナツ型においては、低得点群の比率が高かった。タイプ4においては、「洞察力を形成していくのに重要な働きをする母親の存在（繁田 1985）」が抜け落ちているので、洞察力も低くなる傾向にあるのだろう。

洞察力テストを進めていくと、子ども達の中には、筆者の教示を聞く前に言葉を発する子どもがいた。たとえば、そういう子どもは、排泄場面を見た瞬間、「お母さんがびーんとして、ぼくはずりずり引っ張られて玄関のどこまで行って外へ出される」と言う。「それで〇ちゃんはどうするの」と筆者が尋ねると、「わーんって泣く」と答えた。

また別の子どもは「いつまでも泣いてると、お母さんがうるさいって言うよ」と答えた。

食事場面では、「絶対全部食べるもん」と、ご飯を残すことは許されないんだと言わんばかりの様子で答える子どももいた。

こういう子ども達と接すると、果たして子ども達の心の中に結ばれている愛着の対象としての母親像が、優しく子ども達を受容してくれる存在として位置付けているのだろうかという危惧を抱かざるを得ない。

したがって今後の研究課題は、愛着の対象としての母親像がどのように子どもの心の中で働き、実際の子どもの行動面でどのような影響を及ぼしているのかをさぐっていくことのあると思われる。

引用文献

- 天野菜穂子・宮本正一 1998 三歳児の幼稚園入園児の分離不安
岐阜大学教育学部研究報告 (人文科学), 47, 199-206.
- 天野菜穂子・宮本正一 1999 PATにより測定された新入園児
の愛情のネットワーク 岐阜大学教育学部研究報告 (教育
実践研究), 1, 129-140.
- ボウルビィ 1982 黒田実郎・大羽S・岡田洋子 (訳) 母子関係の
理論 I 愛着行動 岩崎学術出版 (Bowlby, J. 1969 Attach-
ment and loss, Vol. 1, Attachment. Basic)
- 繁多 進 1985 乳幼児の愛着の発達 母子研究6 pp.39-47
- 繁多 進 1987 愛着の発達 母と子の結びつき 大日本図書